

もつ／ある 所有と存在の間

言語によって have に相当する語を多用する所有型言語と、be 相当語を多用する存在型言語があります。

存在を表す動詞：英語の be や日本語の“ある”は三つの意味を持っています。存在（がある）と、コンピュータ繫辞（である）、所在（にある）です。他の言語でも一つの動詞で三つの意味を表すものもあれば、二三種類の動詞で言い分けているものもあります。日本語でもコンピュータは“だ/です”の方が一般的であり、古語も“あり”ではなく“なり”です。

スペイン語やポルトガル語には ser と estar という二つのbe動詞があり、前者は純粋なコンピュータで、恒常的な状態を表し、後者はラテン語の *stāre* (*stand*) に由来し一時的な状態を表すように使い分けられています。そして、存在は、haber、haver (*have*) の三人称単数形を使います。イタリア語の *essere* と *stare* も似た意味と用法ですが、存在は英語の *there is* と似た場所副詞 *ci+essere* で表します。

アイルランド語にも、コンピュータ *is* と存在動詞 *tá* があり、厳密に区別されます。

ドイツでは be 動詞 *sein* がコンピュータとして働き、存在を表すのにも使われることがあります。また *werden* (*become*) が未来形で *sein* の代わりにコンピュータとして使われるほか、未来形や受身形の助動詞として使われます。

スウェーデン語では be 動詞 *vara* の他に一般動詞 *bli* (*remain*) が *estar* のような役割をしています。存在は *finnas* (*find* の受身) を使っています。 *jag tänker, alltså finns jag* (我思う、故に我あり)

アラビア語では be 動詞 *kāna* がコンピュータと存在の意味で使われますが、肯定の現在形では省略されます。コンピュータの否定形には別の否定動詞 *laysa* が使われます。また *wajada* (*find*) の受身形 *wujida* が存在を表すのに使われます。

ペルシア語の be 動詞 *būdan* は三つの意味に使われます。

一方、中国語では、コンピュータには“是”、存在には“有”、所在には“在”と使い分けています。

所有を表す動詞：日本語の“持つ”は所有の他に把持や所持・携帯の意味があり、また *hold up* (持ちこたえる) などの意味にもなります。“用いるく持ち居る”もその派生語です。しかし、この意味の広がりから考えると、所有ではなく把持が中心的な意味と思われれます。 *have* は文章語では“有する”で表すのが普通です。

英語の *have* は、所持・把持の他に、家族；身体特徴・状態、体調、性質；授業・会議・行事、電話、休暇、時間；感情、意見、情報；備品、成分；飲食物などを目的語とします。 *have* を常用する言語では、同様の使い方があるようです。

一方、*have* 相当語がない、または常用されない言語では、所有者の処格形 (場所を表す格)+be動詞で *have* の代用とすることが多いようです。しかし、所有・携帯・把持などその個々の意味を明示する言葉は必ずあります。

所有型言語では感覚なども *have* で表すことがあります。 *I have a fever.* Fr. *J'ai de la fièvre.*
Cze. *Mám horečku.* (I have a fever) cf. *Mám syna a dceru.* (I have a son and a daughter)

クロアチア語、ブルガリア語やスペイン語、ベトナム語では存在を表すのにも *have* を無主語で使います。なお、スペイン語の *hay* は存在文専用で、*have* の場合の三人称単数形 *ha* とは別の形をとります。

Hrva. *U dvorištu ima dječaka.* Bul. *ima momčeta v dvora.*

Sp. *Hay chicos en el patio.* (There are boys in the yard)

Viet. *Có những cậu bé trong sân.* cf. *Tôi có một con trai và một con gái.* (I have a son and a daughter)

フランス語の *il y a* (*there is/are*) も同じですね: *Il y a des garçons dans la cour.* (There are boys in the yard)

ドイツ語には、存在を表すのに *geben* (*give*) を使う独自の表現があります。形式主語 *es* (*it*) を使った無人称文です。対象物は四格 (対格) になります。その他に *es* と *sein* (*be*) を使った人称文もあり、また *liegen* (*lay*) や *stehen* (*stand*) などの状態動詞を使った存在文も頻用され、これらは対象物を主語とする人称文の形をとります。

Es gab keine Hoffnung. (there was no hope)

Es waren zwei Königskinder (Once upon a time there were two princes)

Es liegen einige Bücher auf dem Tisch. (There are some books on the table)

ポーランド語では、存在の肯定形は be動詞を使いますが、否定形では have を無主語で使います。

Po. Tu jest twoja książka. (here is your book) Tu nie ma twojej książki. (here is not your book)

また、クロアチア語では、現在形では have を無主語で使いますが、過去形や未来形は be動詞を使います。

U Zagrebu ima mladića koji dobro govore engleski. (ザグレブには英語をよく話す青年達がいる)

U Zagrebu je bilo mladića koji su dobro govorili engleski. (ザグレブには英語をよく話す青年達がいた)

存在型言語では、所有と存在が同じ形を取り、同一の構文として扱うことができます。意味上の主語に処格（または同等の前置詞/後置詞）を使うのが一般的ですが、所有の場合は属格を使う言い方のあるものもあります。

ロシア語では所有者を前置詞 *y* (の許に、*chez*) で表します。

У меня есть сын и дочь. (私には息子と娘がある) У меня жар. (私には熱がある)。

В этой комнате есть два окна. (この部屋に窓2つある)

ロシア語には動詞 *иметь* (have) がありますが、硬い文章でまたは不定詞が要求されるときだけ使われます。ウクライナ語 *мати* やベラルーシ語 *мець* も同様ですが、同じスラブ系でもチェコ語など他のスラブ諸語では同じ語源の *mít* (have) などを常用します。

セルビア語では、現在形のみ *imati* を使い、他の時制では *be* 動詞 *bìti* を使った表現をするそうです。

アイルランド語では前置詞 *ag* (at) などを使います。人称代名詞では融合形になります。

Tá mac agus iníon agam. (at me) Tá fiabhras orm. (on me)

同じケルト語派でもウェールズ語では別の前置詞を使います。

Mae mab a merch gyda fi. (with) Mae twymyn arna i. (on)

アラビア語には前置詞 *li* (for, belonging to)、*ʕ* *inda* (at, chez)、*maʕ* *a* (with)、*ladā* (at, chez) を使った所有構文があります。身体部分や親族など譲渡不可能な所有を表す場合は、*ladā* を使います。

Li-ṭ-ṭālibi sayyāratun. (the student has a car) ʕ inda at-tājiri nuqūdun. (the merchant has moneys)

Maʕ ī sāʕ atun. (I wear a watch) Ladayya suālun. (I have a question) Ladayhi ibnuhu. (he has a son)

バルト語派のラトビア語では所有者を与格にします。 Man ir dēls un meita. Man ir drudzis.
なお、同じバルト語派のリトアニア語では *turėti* (have) を使います。

フィン語では、所有は所有者を接格 *-lla/-llä* (on) とし *be* 動詞 *olla* を使って表します。

Minulla on poika ja tytär. Minulla on kuumetta. Minulla on tietokone. (私にパソコンがある)

存在文は場所を接格または内格 *-ssa/-ssä* (in) として表します。 Pöydällä on kirja. (机の上に本がある)

Kahvilassa on tyttöjä. (喫茶店に女の子たちがいる) cf. Tyttöt ovat kahvilassa. (その女の子たちは喫茶店にいる)

エストニア語も同様です。 Mu on poeg ja tütar. Mu on palavik. Mu on arvuti, Laua on raamat.

タミル語では、所有者を与格または位格で表します。

ongaḷukku piḷḷe irukkaā? (Do you have children) ongagiṭṭe kaaru irukkaā? (Do you have a car)

シンハラ語では、与格構文で所有を表します。

maṭə putek innə wa. (私には息子がいる)

所有に属格形を用いる言語の例として以下のようなものがあります。

ハンガリー語では被所有物に所有者を表す所有接尾辞を付けます。

Van egy fiam és egy lányom. (私の息子一人と私の娘一人がいる)

所有者を与格 *-nek* で明示することも可能です。

Nekem van egy fiam és egy lányom. *nekem* は *én* (I) の与格 (私には)

トルコ語でも被所有物に所有者を表す所有接尾辞を付けます。所有者が人称代名詞の場合はそれだけでもよいのですが、所有者を明示するにはその属格を使います。

Bir oğlum ve bir kızım var. (私の息子一人と私の娘一人がいる)

Benim bir oğlum ve bir kızım var. (私の、私の息子一人と私の娘一人がいる)

Arkadaşımın bir oğlu ve bir kızı var. (私の友人の、彼の息子一人と彼の娘一人がいる)

トルコ語は属格表現だけですが、同じテュルク語でもウズベク語やカザフ語では対象が物の場合は属格ではなく処格 *mende* (in me) を使うようです。

Oz. Mening bir o'g'lim va bir qizim bor. (I have a son and a daughter) Menda qalam bor. (私にはペンがある)

ベンガル語では、所有者を属格形で表します。

Tomār ka jan chele āche (君の何人子供がありますか) Āmār ṭākā āche (私のお金があります)

ヒンディー語でも、所有者を属格で表します。

Merā ek betā aur ek betī hai. (私の一人の息子と一人の娘がある)

ヒンディー語では所有者と所有対象の関係によって属格表現を含めて4種類もの構文があるそうです。

本質的所有 kā 生得 Merī mā~ hai. (I have a mother) Uskī do ā~khē haī. (He has two eyes)

非本質的所有 ke pās 獲得 Mere pā_s do bacce haī. Mere pās ek idea hai. (I have an idea)

近接所有 ke pās mē 所在 Mere pās mē mā~ hai. (mother is with me) Mere pās mē ek ghar hai.

抽象所有 ko Mujhe ek dikkat hai. (I have a problem) Use usse do bacce haī. (She has two kids with him)

mujheとuseは人称代名詞のko格

ウラル諸語やテュルク諸語の他にも人称代名詞所有格 (my など)の役割を果たす短形である所有接尾辞をもつ言語があります。なお、その多くは前置詞にも接尾されます。

テュルク諸語では単数で一人称から順に、-(i)m, -(i)n, -i 複数で -(i)miz, -(i)niz, -leri. im, m, um, ümのように(子音で終わる名詞の場合は)母音調和があります。格語尾は所有辞の後に付きます。

ハンガリー語では、同じく -(a)m, -(o)d, -(j)a; -(u)nk, -(o)tok, -(j)un。やはり、母音調和があります。格語尾は所有辞の後に付きます。

フィンランド語では、-ni, -si, -nsa; -mme, -nne, -nsa/(a)n。母音調和があります。格語尾は所有辞の前に付きますが、両者が融合することがあります。

ペルシア語では、-am, -at, -ash; -emān, -etān, -eshān。

アルメニア語では、-s, -t。一二人称単数のみ。

アラビア語では、-ī, -ka/-ki, -hu/-hā; -nā, -kum/-kunna, -hum/-hun(na)、双数 -nā, -kumā, -humā。双数がある他に二三人称で男女の区別があります。格語尾 (u/i/a)は所有辞の前に付きます。

ヘブライ語では、-i, -kha/-kh, -o/-a; -nu, -khem/-khen, -hem/-hen。やはり男女の別があります。

マレー語では、-ku, -mu, -nya。単数だけです。

アイヌ語では、ku=, e=, ;ci=/a=, eci=, -。接頭辞で、一人称複数に除外形と包括形の区別があり、三人称は無語尾です。

モンゴル語には、mini, cini, ni; maani, tani, ni があり、分かち書きされますが、格語尾の後に付きます。mini, cini, ni は、所有の他に取り立ての副助詞 (は)としても使われます。この他、再帰人称接辞 -oo/-ee があります。

なお、スワヒリ語には所有接辞はありませんが、人称代名詞の短縮形 -mi, -we, -ye; -si, -nyi, -o が前置詞に接尾されます。

現代中国語の「有」は所有と存在の両方の意味を持つと考えられます。所有者が主語に立つと所有、処格が文頭に来ると存在の意味です。構文上は日本語の「ある」と類似しています。

我有一個兒子和一個女兒。 卓上有一本書 (机の上に本がある)

なお、存在物を主語に立てる場合は“在” (にある)を使います。 這本書在桌子 (この本は机の上にある)

クメール語やタイ語、ベトナム語も同様で、所有と存在に同じ動詞を使い、コンピュータには別の動詞を使います。

Kh. K^hnom mi·ən ko: nproh nuŋ ko:nsrəi. Th. Chān mī lūkchāy læa lūkšāw. (私には息子と娘がある)

タガログ語でも、所有と存在に同じ may を用います。所有の場合は所有者を主格にし、存在の場合は場所を場格で示します。 May pera si John (ジョンはお金がある) May pera sa mesa (机の上にお金がある)

韓国語では所有者を主題語にして存在動詞で所有を表します。正確にいうと所有者は日本語の“は”にあたる -eun/-neun (副助詞)で受け、被所有物を -i/-ga (“が”に相当、主格助詞)で受けます。存在文には処格を使いません。

Naneun adeul-gwa ttal-i issseubnida. (私は息子と娘がいます)

Chaegsang-wie chaeg-i issseubnida. (机の上に本があります)

スワヒリ語では、繫辞 *kuwa* (である)+前置詞/接続詞 *na* (*with*)で所有を表します。ただし、現在時制では*kuwa* は使わず、*-na* に主語接辞 (私なら *ni*)を前置し、否定の場合は否定の主語接辞 (同じく *si*)を前置します。

Nina kitabu (I have a book)、 Sina kitabu (I have not a book)

主語が一般名詞ならその名詞クラスの主語接辞 (*kitabu* なら *ki-*)を前置します。現在以外の時制だと *kuwa* が出てきます。Kitabu kina karatasi. (The book has paper) Nilikuwa na kitabu. (I had a book)

そして、*pa-*、*ku-*、*mu-*など場所クラスの主語接辞と *na* を組み合わせると、存在文になります。

Mahali kuna nyumba. (There is a house) つまり、所有と存在は同じ構文で表されます。

ポリネシア語には *have* も *be* もなく、前置詞句が述語代わりに使われます。

サモア語：E a Feleti le ta 'avale (その車はフェレティのものだ) *e* は未完了の時制小辞、*a* は所有格、*le* は定冠詞
所在は Sā i Apia lo mātou tinā… (私の母はアピアにいた) *sā* は過去の時制小辞、*i*は所格、*lo*は定冠詞、*mātou*は*my*

ハワイ語：A rāua terā fa'a'apu. (あの畑は彼らのものです) *a* は所有格、*rāua* は *they*、*terā* は *that*

Mai Huahine mai te mau 'orometua. (教員達はフアヒネ島からです) *mai* は起点格&方向小辞、*te* は定冠詞、*mau* は複数

タヒチ語：I te fare nei te taote. (医師は家にいた) *te* は定冠詞、*nei* は指示詞 *this*で前に係ります。

その他の所有表現として、モンゴル語には名詞に接尾辞 *-toi* を付けた「をもつ」という意味の形容詞があります。

Bi neg xüü, xoyor oxintoi. (私は息子と娘がいます)

トルコ語にも同様の接尾辞 *-li* があります。 *kiz uzun saçlı* (娘は長い髪をもつ)

アラビア語には *dhū* (持主 性・数・格変化する)という名詞があり、常に被所有物を伴い、時に所有文の述語として使われます。なお、アレキサンダー大王 *Iskandar* は *dhū l-qarnain* (二本角を持つ男)という異名で知られ、星座のカシオペアは *dhātu l-kursī* (椅子を持つ女)と呼ばれています。

huwa dhū dhakā'in maḥdūd. (he has limited intelligence)

マレー語では *punya*、*memiliki* (*have*)に加えて、名詞に接頭辞 *ber-*を付けた「をもつ」という意味の動詞が作れます。 *Dia berbadan tinggi*. (He has a tall body)

存在型言語で、所有者と所有対象の関係や所有対象の性質に応じて異なる動詞を使って表現するものもあります。

日本語では対象が生物か無生物かによって「うちには子供が三人いる」「うちにはパソコンがある」と、イロとアルを使い分けます。シンハラ語でも、有生物には *innəwa* を、無生物には *tiyenəwa* を使います。グルジア語でも人間・動物には *mqavs*、無生物には *makvs* を使うそうです。北米のナヴァホ語では、人間・動物と無生物で *be*、*lie* など幾つかの動詞で別々の言葉を使うそうです。

なお、所有叙述表現ではありませんが、ポリネシア諸語では、譲渡不可能なものを示す *o* 所有格と譲渡可能なものに使う *a* 所有格の区別があり、所有代名詞も同様だそうです。たとえばサモア語では、lona susu (彼女の乳房) と lana susu (彼女の乳汁)、se tali o Alofa (アロファへの返事) と se tali a Alofa (アロファからの返事) が区別され、マオリ語では te Pukapuka a Heremaia (エレミヤ[が書いた]書) と te Pukapuka o Hōhua (ヨシュア[の]ことを書いた]書) が区別できるそうです。

所有者と所有対象の所有関係は、たとえば以下のように区分され、それに応じて表現が変わることがあります。

- A. 譲渡不可能所有 (親族および身体部位) I have blue eyes/two sisters.
- B. 無生物譲渡不可能所有 (全体部分関係) That tree has few branches.
- C. 恒常所有 (所有権) Judy has a car but I use it all the time.
- D. 抽象所有 (病気や感情) He has no time/no mercy.
- E. 物理所有 (携帯) I want to fill in this form; do you have a pen?
- F. 無生物譲渡可能所有 (近接関係) That tree has crows on it.

その他に：典型的所有関係；家族・友人関係；携帯関係；全体と一部の関係；(物と物の)/(人と事の)近接関係；

物理的所有；一時的所有；永続的所有；分離不可能所有；抽象的所有(病気、感覚、心理状態)；無生物分離不可能所有(全体と部分)；無生物分離可能所有；などの分け方もあります。

存在型言語では、体調や気持の表現などでも、意味上の主語を処格などで表す表現が見られます。「私は彼のいうことがわかる」、「私は彼女が好きだ」では「私」は主題語で「～が」が文法上の主語と考えられます。

ヒンディー語では与格構文で同様の表現ができます。自分の意思が及ばない現象は与格構文で表現するのだそうです。

yah khabar sunkar, hamē baṛī khuśī huī (この知らせを聞いて僕らにはとても喜ばしかった)
ham sab ko miṭhā iyō bahut pasand haī (私達みんなにとってお菓子が大好き) mujhe bukhār hae (僕には熱がある)
hamem baṛā sukh milā (私達には大きな幸せが得られた)
mujhe mālūm ki āpne merī kitnī sahāyatā kī hai (あなたが私をどんなに助けてくれたか私には分かっています)

スリランカのシンハラ語も同様に与格構文を使います。

maṭa badaginiyi (私には空腹だ) maṭa atə ridenawaa (私には手が痛む)
シンハラ語では、動作主の格だけによって意図的な行為か否かを区別するそうです。
udee 4.00 wenə koṭə mamə əhārenə wa. (朝4時になると私は目覚める) 主格
koṭə əætīn sindu kiyə nə han ḍak əhilaa maawə əhəruṇa. (遠くから歌声が聞こえ、私は目覚めた) 対格
papuwə gāhenə weegə yə hondə ṭə mə wādi wuṇa. maṭə əhəruṇa. (心臓の鼓動がとても速くなり、私は目覚めた) 与格

タミル語にも与格構文があります。

engalukku indap pudavai pidittirukkīradu (私たちにこのサリーが気に入りました)
enakkut talai valikkīradu (私には頭が痛い)

フィン語では属格その他の処格を使う用法があります。

Pekka on hauska lähteä. (ペッカは出かけるのが楽しい) 属格
Pekkaan voi luottaa. (ペッカには信頼できる) 入格 (into) voi は voida (can) の三人称単数形
Minulle on vaikeaa puhua itsestäni. (私にとって、自分のことを話すのは難しい) 向格 (onto)
Heille riittää noudattaa vanhaa kaunista tapaa. (彼らにとっては、古く優美な方法に則るので十分である) 向格
Pekkaa väsyttää. (ペッカは疲れている) 分格目的語、väsyttääは他動詞三人称単数形
= Pekka on väsynyt. 主格+形容詞

アイスランド語にも 与格構文があり、特に中間態-stと共に使われます。

Deim er kalt. (They are freezing) Henni fór fram. (She got better)
Jú, mér leiðist ósköp, segir Sigríður. (Yes, I am bored, Sigríður said)

ロシア語ではこの種の構文は経験者与格構文と呼ばれており、無人称文です。

Мне холодно (私には寒い) cf. В Москве холодно (モスクワでは寒い)
Мне скучно (私には退屈です) Мне прия́тно слы́шать э́то (私にはこれを聞くのは心地よい)
Мне трудно говорить по-русски (私にはロシア語を話すのが難しい)

意味上の主語を対格にした無人称文もあります。

Меня знобит (私を寒がらせる、寒気がする) Меня тошнит (私を嘔吐させる、吐き気がする)
Меня тянет на родине (私を故郷に惹きつける、故郷が懐かしい)

ロシア語では主体、意味上の主語を示す際に、主格>与格>prep+生格>prep+造格という格階層があり、与格は単独で意味上の主語の役割を果たすが、生格と造格は必ず前置詞とともに用い、したがって、生格、造格標示の主体は主格や与格標示よりも一層弱くなります。こうした明確な格標示によって、話し手は主体の関与度を意識的に明示することができます。y+生格は「影響の範囲にある」ことを示し、生格や物主形容詞よりも強い表現、関与の強さを表すそうです。

У меня болит голова (頭が痛い)
У коллеги сейчас совещание (同僚はいま会議中だ) У меня занятие (私は授業だ [授業をする/授業を受ける])
Ивану нравится этот город (イワンにはこの町が気に入っている) Ивану は与格
Ему привалило большие счастье (彼に大きな幸運が舞い込んだ)

С ним случилось несчастье (彼に災難が起こった) ним は造格

На него нашел страх (彼に恐怖が襲った) него は対格

こうした表現は、動作主の主体性を弱化し、状況のせいにする効果があるそうです。

Мне не хочется работать (私は働きたくない気がする) cf. Я не хочу работать (私は働きたくない)

存在型言語のなかには、一部の助動詞を同様の斜格構文で表すものがあります。日本語の「私は～する必要がある」や「私は～することができる」がその一例です。

フィン語には、動作主を主格にする voida (can)、saada (may)、haluta (want)などの他に、動作主を属格にし三人称単数形の無人称文を使う属格構文による助動詞がいくつかあります。

Minun täytyy nyt lähteä. (I must leave now)

Minun tulee tehdä tämä huomiseksi. (I have to do this by tomorrow)

Sinun pitää mennä töihin. (You have to go to work) Meidän pitäisi mennä töihin. (We should go to work)

Sinun kannattaa miettiä sitä jo etukäteen. (It is worth for you to think about it already in advance)

Sinne täytyy mennä, (One must go there) 無人称

ハンガリー語にも人称変化する助動詞 tudni (can)、akarni (want)、fogni (will)や、形容詞 képes (able)、köteles (obliged)の他に、無人称文を使う助動詞や形容詞があります。意味上の主語は与格 (-nak/-nek)や人称不定形で表します。

Péternek tanulnia kell. (Peter must study) Tanulni kell. (One must study)

Lehet pihenni. (One may take a rest) Délre muszáj hazaérnünk. (We have to get home by noon)

Mindenkinek kötelező adót fizetnie. (Everybody has to pay taxes)

Szabad dohányozni. (One may smoke) Itt tilos dohányozni. (One must not smoke here)

ラトビア語にも、drīkstēt (may, be allowed)、varēt (can)、vēlēties (want)など人称変化する助動詞の他に無人称文の助動詞があります。意味上の主語は与格をとります。

viņam vajadzēja daudz strādāt (he had to work a lot)

vajadzēja būt pagājušai jau kādai stundai (An hour must have already passed)

mums nākties izvēlēties starp daudziem cienīgiem variantiem. (We have to choose between many worthy options)

リトアニア語にも、galėti (can)、turėti (must)、norėti (want)などの助動詞の他に、現在受動分詞や形容詞の中性形が無人称文で使用されます。意味上の主語は与格をとります。

Jums jau galima grįžti namo (あなたはもう帰っていいですよ)

Draudžiama valgyti, nes tai sugedę (腐っているから、食べてはいけません)

Velu, todėl mums jau reikia grįžti (遅いから私達は今帰るべきだ)

Pasenus privalu klausiti vaikų (年を取ったら子供の言うことを聞くべきだ)

ヒンディー語には、saknā (できる)など幾つかの助動詞や補助動詞がありますが、-nā cāhnā (したい)や-nā honā (しなければならない)などは与格構文を使います。

āpkō kiyā cāhie (あなたには何がご入用ですか)

ham sab kō aur mehnat karnī cāhie (僕らにはもっと努力することが必要だ)

mujhe āth baje istešan jānā hai (私には8時に駅に行かなければならない)

āpkō lāl qilah jānā nahī partā (あなたにはルールキラーに行く必要はない)

āpkō kitnī zabānē bolnī āte hai (あなたには何か国語話せるのですか)

ベンガル語でも、pārā (can)、chaoyā (want)など主格を用いる助動詞の他に、与格構文を用いた助動詞 haoyā (must)があります。主動詞は不定詞 (-te)の形をとります。 āmāke yete habe (I must go)

また、deoyā (give)は不定詞を受けて allow to の意味になり、これが三人称複数形で無人称構文として be allowed, can の意味の助動詞となります。意味上の主語はやはり与格となります。 āmāke yete dila (I could go)

yāoyāは不定詞を受けるときは主格構文で want の意味ですが、動名詞 (-ā)を受けるときは無人称構文を取り、possible の意味になります。意味上の主語が人の場合にだけ与格 (-ke)になるそうです。

tāke buro balā yāy nā (It is not possible to call him an old man)
bābār kono kathā šonā gela nā (No father's words could be heard)

シンハラ語でも、与格構文による助動詞表現があります。

matə punchi akuru kiyawanna bææ. (私には小さい文字を読むことができない)
matə japan bhaashaawa igenaganna oona. (私は日本語を勉強しなければならない)

ロシア語の助動詞は、уметь (能力的にできる)とмочь (状況的にできる)、それに性・数変化するдолжен (しなければならない)以外は、厳密にいうと形容詞の短語尾中性形であり、述語副詞と呼ばれています。主語なしで無人称文として使えますし、意味上の主語を使うときは与格などに置きます。

можно (may)、возможно (possible)、нельзя (完了体 cannot、impossible)、(不完了体 not allowed)

надо (should)、нужно (need)、необходимо (indispensable)

Нельзя ехать на красный сигнал светофора. (赤信号で車を進めてはならない)

Нам надо закончить эту работу до завтра. (我々は明日までにこの仕事を終わらせないといけない)

Вам не нужно прийти завтра. (あなたは明日は来なくてもいいです)

この他に、一般動詞で助動詞の用法をもつものが幾つかあり、三人称単数、中性形の無人称文となり、やはり主語は与格をとります。この種の助動詞では一般に主動詞が肯定形では完了体、否定形では不完了体となります。

Мне хотелось посмотреть этот фильм. (私はこの映画を見たかった) посмотреть = 完了体)

Мне не хотелось смотреть этот фильм. (私はこの映画を見たくなかった) смотреть = 不完了体)

Тебе следует сказать об этом. (君はこのことについて話すべきだ)

Ей не удалось встретить сестру на вокзале. (彼女はうまく駅で妹と会えなかった)

Мне пришлось заплатить сто рублей. (私は100ルーブル払うはめになった)

Ему стоило большого труда решить эту задачу. (彼はこの問題を解くのに大変な苦勞をした)